第 18 回 展 示

# 初代学長・恒藤恭の人と学問

*――新資料と絵画・スケッチで描く――*

「雪の大山」恒藤恭筆(療養生活時代)

展 示 期 間　：　2004（平成 16）年 7 月～

展 示 場 所　：　学術情報総合センター　1 階

大阪市立大学　大学史資料室

# 初代学長・恒藤恭の人と学問

*――新資料と絵画・スケッチで描く――*

本学の初代学長・恒藤恭は、日本の法哲学の確立に大きな足跡を残し、1933 年の京大滝川事件では学問の自由のためにたたかった法学者である。本学の前身・大阪商科大学の学長・河田嗣郎が、京大を辞した恒藤と末川博を受け入れ、この結果、本学の自由主義の学風が一段と強まることになった。戦後、恒藤は、商大学長から本学初代学長となり、本学の総合大学としての基礎確立に尽力するかたわら、日本国憲法の社会への定着と国際平和のために積極的に活動した。

恒藤は、松江の少年時代は文学を志し、一高時代には芥川龍之介と深い親交をむすんだ。一高卒業後は、進路を法科に転じて京都法科大学に進み、学者の道を歩んだが、本学恒藤記念室が所蔵する資料のなかには、恒藤が松江時代から一高・京大時代にかけて制作した多数の文学作品、絵画・スケッチが残されている。

近年の大学史資料室の調査によって新資料が多数発見され、今まで知られなかった恒藤の戦時下の姿なども明らかになった。今回の展示は、新資料と絵画・スケッチなどによって、初代学長・恒藤の人と学問を描くものである。

## 恒藤　恭　年譜

| | |
|---|---|
| 1888（明治21）年 | 井川精一、ミヨの次男として、松江市に生まれる |
| 1901（明治34）年 | 島根県第一中学校入学 |
| 1910（明治43）年 | 上京し、都新聞見習記者となる |
| | 第一高等学校入学、二年間「向陵」で寮生活 |
| 1913（大正２）年 | 京都帝国大学法科大学に入学 |
| 1916（大正５）年 | 同大学院入学、国際公法専攻 |
| | 恒藤雅子と結婚、恒藤と改姓 |
| 1919（大正８）年 | 同志社大学法学部教授 |
| 1922（大正11）年 | 京都帝国大学経済学部助教授 |
| 1924（大正13）年 | 在学研究のため渡欧し、フランス、イギリス、ドイツなどに滞在 |
| | 1926年帰国 |
| 1928（昭和３）年 | 法学部助教授 |
| 1929（昭和４）年 | 法学部教授 |
| 1933（昭和８）年 | 京大滝川事件のため退官 |
| | 大阪商科大学講師 |
| 1940（昭和15）年 | 大阪商科大学教授 |
| 1946（昭和21）年 | 大阪商科大学学長　京大法学部教授兼任（1949年まで） |
| 1949（昭和24）年 | 大阪市立大学総長（のち、総長を学長と改称） |
| 1957（昭和32）年 | 大阪市立大学学長を辞任 |
| 1967（昭和 42）年 | 京都で死去（78歳） |

# ＜ 展　示　資　料 ＞

○　**水彩画**　　9点

○　**写真〔1〕**　恒藤恭　学長（1955年）

## 1　松江時代

恒藤（旧姓井川）恭は、1888年、旧亀井藩士で島根県官吏であった井川清一とミヨの次男として松江市で生まれた。井川は島根県第一中学校（現・松江県立北高等学校）時代には文学にあこがれ、中学卒業後3年あまりの療養生活時代は文学への志望がもっとも強かった時期である。詩・短歌・俳句・小説などの多数の文学作品が作られた。

「海の花」は、『都新聞』懸賞小説に第一等で当選した作品で、井川の並々ならぬ文学的才能を示している。未発表の小説「大空」は、療養生活時代のみずからの内面を描いた作品である。（井川天籟・鈴かけ次郎は恒藤恭の筆名）

〔1-3〕

〔1-8〕

**1-1　中学時代の日記**

**1-2　中学時代のスケッチ**

**1-3　日記 『無我無為録』（1907年－1908年）** 中学卒業後の療養生活中、植物の栽培記録を詳細に記している。

**1-4　日記　（1908年）** 約1ヶ月半の神戸衛生院入院中の日記。入院中、六甲山などを散策、スケッチを残している。

**1-5　日記**「妙見山の石標の所から登る。・・・ この辺はもう眺めがひらけて兵庫神戸の港のさま、沖にとまって居る汽船のかづかづ、淡路島などよく見える。こゝろみに汽船をかぞへたら四十余隻居た。」（1908年9月20日）

**1-6　療養生活時代のスケッチ　（1908年9月20日）**

**1-7　小説「海の花」（複写）（1908年7-8月連載）**

『都新聞』懸賞小説第一等に当選した作品。

**1-8　小説「大空」** 神戸衛生院の体験をもとに書かれた小説（未発表）。

**1-9　繁（恒藤恭の姉）宛手紙　（1908年7月16日）** 小説「海の花」の当選を知らせる。

**1-10　「大山」（『松陽新報』掲載）（1906年8月）**

**1-11　写真・ 中学時代　家族とともに**

## ２　一高時代

井川は、1910 年、上京し都新聞見習い記者となるが、素見のつもりで受けた第一高等学校の入試に見事合格する。一高入学5ヶ月後、井川は大逆事件を弾劾する蘆花の謀叛論演説に接し、深い衝撃を受けた。その後の思索や芥川龍之介と親交を深めるなかで、文学への道を放棄し、京大法科へ進むことになった。

井川の一高時代の日記「向陵記」は、当時の一高生の様子をリアルに記録した貴重な資料である。芥川のほか、菊池寛、矢内原忠雄、都築正男、藤岡蔵六、成瀬正一、久米正雄、長崎太郎、末弘厳太郎など、後に文学者、学者などとして活躍する人々の若き日の姿が活写されている。また「向陵記」には、当時の校長・新渡戸稲造が、蘆花演説に対し校風擁護の演説をおこなったことも記されている。井川の手製の回覧新聞「南寮タイムス」も、寮生の生活のあり様を伝える貴重な資料である。

〔2-4〕

〔2-8〕

**2-1　郡虎彦の井川恭宛はがき　（1910 年 5 月 30 日）**　神戸衛生院で出会った郡が武者小路実篤に井川を紹介している。

**2-2　「冷酷なる大学病院」（1910 年 9 月 8 日）**『都新聞』見習い記者当時の井川執筆の記事。

**2-3　「二週間の勉強で一高の入学試験を通過した僕の経験」（複写）（1910 年 9 月 16 日）**『中学世界』掲載。

**2-4　日記　「向陵記」**　一高の寮「向陵」での生活を記したノート（1910 年 9 月－1913 年 10 月）が８冊ある。

**2-5　日記　「向陵記」Ⅱ（1911 年 2 月 1 日）**　一高弁論部主催、徳冨蘆花の講演「謀叛論」の筆記。

**2-6　日記　「向陵記」Ⅱ（謀叛論部分　複写）**

**2-7　徳冨蘆花、「謀叛論（草稿）」**『明治の文学　第 18 巻 徳冨蘆花』（2002 年）より

**2-8　『南寮タイムス』 1・2号（1910 年 9 月 26 日、10 月 24 日）**　南寮十番に入寮後、手製新聞を作成して同室者に回覧した。

**2-9　作文「怒」（1911 年 2 月 27 日）**　蘆花演説に衝撃を受けて書かれたと推定される。杉敏介の授業で提出した。

**2-10　「怒」一部一年三ノ組井川恭**　『向陵記』（ 2003 年 3 月 ）より

**2-11　作文「韓非子を読む」（1913 年 2 月末）**　京大法科進学を決めた頃のもので、杉敏介に提出した。

**2-12　写真・　一高時代　南寮十番の同室者とともに（1910 年頃）**

## ３　京都時代

1913 年、京都法科大学に入学した井川は、まもなく沢柳事件を経験し、そのころから京大教授佐々木惣一の知遇を得ることになった。1916 年には、土壌学の権威恒藤規隆の長女・雅子と結婚して、恒藤姓となる。

大学院進学後、恒藤は、研究の中心をしだいに国際法から法哲学に移した。1919 年同志社大学教授・京都大学助教授などを経て、1929 年に京大法学部教授となった。この間、1924 年から２年あまりヨーロッパに留学した。

第１次大戦後の時期に、恒藤の世界主義的な平和主義思想が形成された。1921 年６月号の『改造』の論文「世界民の愉悦と悲哀」は、恒藤の平和主義思想の大胆な表明であるが、この時期の恒藤は時代の進歩を楽観的に見ていた。

〔3-4〕

〔3-17〕

3-1　写真 ・ 同志社大学での講義

3-2　写真 ・ 京大経済学部助教授時代

3-3　写真 ・ 渡欧前日　家族とともに（1924 年 3 月 8 日）

3-4　写真 ・ 留学中のヨーロッパにて（1924 年）

3-5　写真 ・ 恒藤雅子（1913 年頃）

3-6　受講ノート （授業風景スケッチ） 描かれている人物は河田嗣郎か？

3-7　受講ノート

3-8　「大正の初めの頃」（『京都帝国大学新聞』1935 年 4 月 16 日）　長崎太郎（のち京都市立美術大学学長）との交流、沢柳事件などについての回想。

3-9　長崎太郎日記 （複写）（1914 年 1 月 21 日より）

3-10 長崎太郎の井川（恒藤）恭宛はがき （1918 年 8 月 28 日）米価騰貴のための会社からの臨時手当で「丸善へいって早速ターナーの水彩画の大変よい印刷の本を求めました。」と知らせている。当時長崎は、日本郵船に勤務していた。

3-11 小説 「真弓の周囲」（『中学世界』1918 年 10-12 月）

3-12 小説 「王冠をつくる人」（複写）（『中学世界』1915 年 6 月）

3-13「世界民の愉悦と悲哀」（複写）（『改造』1921 年 6 月）

3-14『批判的法律哲学の研究』（1921 年 10 月）

3-15『国際法及び国際問題』（1922 年 10 月）

3-16『法律の生命』（1927 年 5 月）

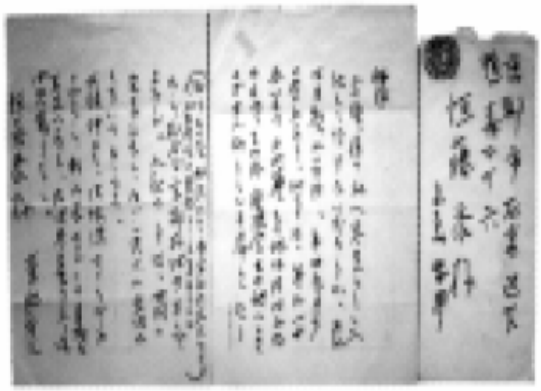
3-17 恒藤雅子宛　はがき （1915 年 1 月 6 日） 婚約時代の年賀はがき。

## 4　京大事件で大阪商科大学へ

恒藤は、1930 年代初頭に、満州事変、ナチス擡頭などの情勢に直面し、時代が戦争と反動の方向に転じたことを認識せざるをえなかった。1933 年、京大滝川事件が起こり、恒藤は佐々木惣一らとともに学問の自由を守るため権力と対決した。恒藤の決意表明ともいえる『改造』掲載の「死して生きる途」は、たたかう多くの学生たちを深く感動させた。

恒藤は、京大辞職後、大阪商科大学長・河田嗣郎の招きで末川博とともに商大に移った。1930 年代の恒藤は、自己の学問研究を大きく発展させたが、戦時下の著作、研究ノートなどから、理性的精神を堅持し、世界史の行方を見定めようとする強い意思を読み取ることができる。

〔4-5,6〕



〔4-10〕

**4-1　（写真）京大滝川事件での辞職教官（1933 年）**

**4-2　京大事件の報道（複写）（『大阪朝日新聞』1933 年 5 月 27 日）**

**4-3　「死して生きる途」（『改造』1933 年 7 月）**

**4-4　「総長と教授と学生大衆」（『文藝春秋』1933 年 8 月）**

**4-5　『京大問題の真相』政経書院 1933 年 6 月**

**4-6　『瀧川教授事件』京都日出新聞社 1933 年 6 月**

**4-7　小西重直宛の手紙の下書き（1933 年 6 月 16 日）** 小西重直京大総長に対し、辞表を文部省に進達することを求めた手紙の下書き。

**4-8　日記**　「八時すぎ長崎君来訪。十時まへ登学、末川君の部屋で瀧川、田村君などと話す。部長室にゆき総長に面会をまつ。佐々木さんもこられる。ひる一人進々堂にゆく。后二時すぎ手紙を総長に呈出してかへる。」（1933 年 6 月 16 日）

**4-9　恒藤恭・田村徳治の声明書（立命館大学図書館末川文庫所蔵）（複写）（1933 年 7 月 22 日）**

**4-10　菊池寛の恒藤恭宛手紙（1933 年 7 月 25 日）** 京大事件で辞職した恒藤に対し、菊池寛は文藝春秋社への入社を勧めた。

**4-11　日記**　「あさ佐々木さんを訪ふ（商大の話）、あとから末川氏も来訪。山田さんがこられたので二人は帰る。」（1933 年 9 月 22 日）

**4-12　日記**　「・・・二時半商大にゆき河田さんに会って打ち合せをした。」（1933 年 10 月 6 日）

**4-13　「学究生活の回顧」（『思想』1953 年 2 月）** 文部省は教授採用を認めなかったため、大阪商科大学は恒藤、末川を専任講師として採用した。

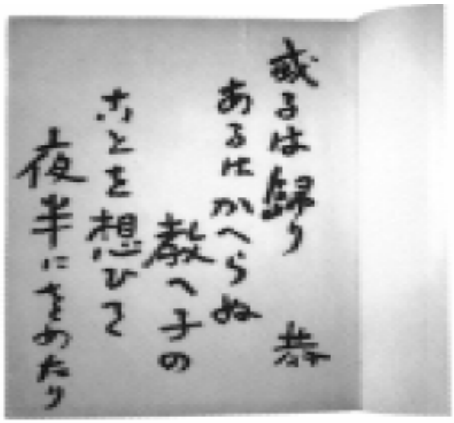
**4-14　「詩三篇」（複写）（『大阪商科大学竣工記念新聞』1935 年 11 月 8 日）**大阪商科大学杉本学舎完成時に寄せた詩

## 5　戦中から戦後へ

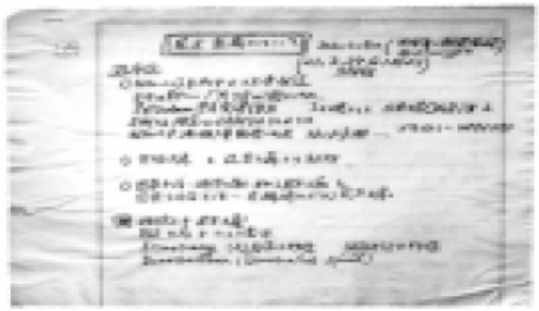
恒藤関係資料中の戦時下の研究ノートなどには、これまで知られなかったヒットラー、ソ連、日中戦争などに関する恒藤の研究、思索の軌跡を示す記述がみられる。資料中に『大阪商科大学国際公論』創刊号（1939 年）がただ 1 冊現存するが、同誌掲載の「世界苦を克服する者」は厳しい言論抑圧のもとでの恒藤のぎりぎりの抵抗を示した一文である。

1945 年以降、ドイツおよび日本の敗北、国際連合の成立などをみて、恒藤は、世界史の大きな転換を確信した。戦後の日本社会は、恒藤に多くの発言と活動を求め、恒藤は立命館大学総長となった末川らとともに、関西の知識人の代表的存在となる。恒藤は、大阪商科大学長、ついで大阪市立大学長として、学長の激務を努めるかたわら、市民の間に入って日本国憲法の普及に努め、世界平和や全面講和の問題について積極的に発言し、また文化国家建設の必要を説いた。

多数の講演レジュメは、市民の間での恒藤の積極的活動を物語る。また、山根徳太郎の恒藤宛手紙から、恒藤が難波宮保存にも尽力したことがわかる。




〔5-15〕



〔5-18〕

5-1 （写真）大阪商科大学ゼミの学生たちとともに（1941 年 12 月 22 日）

5-2 『法の基本問題』岩波書店 1936 年 11 月

5-3 『法的人格者の理論』弘文堂書房 1936 年 11 月

5-4 『戦時国際公法　京大　恒藤教授述』（講義録 1932 年）

5-5 「世界苦を克服する者」（『大阪商科大学国際公論』1939 年 5 月）

5-6　研究ノート（1930-35 年）「国際政治ニオケル独逸ノ地位　十. 五. 十三」、「国際政治ニオケルU.S.S.R.ノ地位、伊ヱ紛争」などの記述がある。

5-7　研究ノート（1936 年）唯物史観に関する記述などがある。

5-8 研究ノート（1936-38 年）日中戦争に関する記述などがある。

5-9 『特高月報』（1943 年 4 月 20 日 /1944 年 5 月 20 日）

5-10『特高月報』（複写）（1944 年 5 月 20 日）名和統一とともに恒藤恭の名前も記載されている。

5-11 田中圭「暗い谷間の挿話」（『有恒会報』第 96 号 1981 年 6 月）商大忠誠会会報「忠誠」特集号のため、「時局と学生」の内容で「恒藤恭教授を囲む公開座談会」が開催されたが、その内容は記事にはできなかった。

5-12 日記「昭和 20」1945 年 8 月 15 日には、「正午　玉音放送」とある。

5-13「座談会 大正を中心とした思想界の追憶 司会 山根徳太郎」（『世紀』1946 年 8 月 15 日）

5-14 山根徳太郎の恒藤恭宛手紙（1957 年 10 月 8 日）学長退任に際し、難波宮跡保存への恒藤の支援に謝意を表している。

5-15 恒藤恭筆 （1952 年 11 月 15 日 史泉会署名簿）

5-16『大阪人』4巻2・3号（1950 年）

5-17「市立大学の構想」（抜粋）『大阪人』４巻１号（1950 年１月）より

5-18 講演レジュメ「民主主義について」
1946 年３月 24 日 午后 1:00- 京都駅

5-19 講演レジュメ「憲法改正ト民主主義」
1946 年７月３日 午后 1:30-3:30 京都市役所

5-20 『新憲法と民主主義』 岩波書店 1947 年９月

5-21 『法の本質』岩波書店 1968 年 10 月

5-22 『哲学と法学』岩波書店 1969 年３月

5-23 『法の精神』岩波書店 1969 年６月

5-24 『法と道徳』（岩波書店 1969 年９月）

*― 最近出版された恒藤恭に関する本 ―*

5-25 竹下賢、角田猛之編『恒藤恭の学問風景』法律文化社 1999 年４月

5-26 関口安義著『恒藤恭とその時代』日本ｴﾃﾞｨﾀｰｽｸｰﾙ出版部 2002 年５月

5-27 大阪市立大学大学史資料室編 『向陵記－恒藤恭－高時代の日記－』大阪市立大学 2003 年３月

5-28 山崎時彦編著『恒藤恭の青年時代』未來社 2003 年 10 月

5-29 広川禎秀著『恒藤恭の思想史的研究』大月書店 2004 年２月

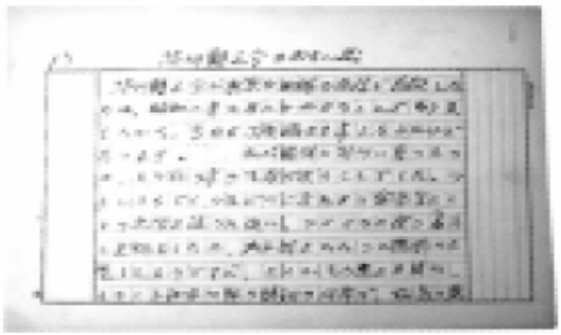
5-30 宍倉忠臣編 井川恭著『翡翠記』山陰中央新報社 2004 年５月

## ６、７ 芥川龍之介との交流、スケッチ（Ⅰ）（Ⅱ）

芥川と恒藤の交流は、恒藤にとっても芥川にとっても、大きな意味があった。恒藤は芥川の並外れた文学的才能をいちはやく見抜いたからこそ、文学志望を断念し、法学――法哲学――に転じたともいえる。二人の間の手紙は、二人の交流の深さ、濃やかさを雄弁に物語っている。

恒藤は、松江時代から風景・人物などのスケッチを多数描いている。一高入学後は、西欧から入ってきた流行の画風を反映した水彩画も多数制作している。一高時代に杉敏介に提出した作文「絵画論」では、絵画に関する考え方を展開している。

〔6-6〕



〔6-8〕

（Ⅰ）

6-1　日記「向陵記」Ⅶ　トルストイ、乃木希典などについての芥川との会話を記している。（1913 年 2 月 5 日）

6-2　『向陵記』（2003 年 3 月）より

6-3　日記「向陵記」Ⅷ　東京について芥川との会話を記している。（1913 年 6 月 17 日）

6-4　『向陵記』（2003 年 3 月）より

6-5　「赤城の山つつじ」（『松陽新報』1913 年 7 月）芥川龍之介、長崎太郎、藤岡蔵六とともに赤城・榛名方面へ卒業旅行をしたときの紀行文

6-6　スケッチ「赤城のスケッチ」（1913 年）

6-7　原稿「芥川龍之介宛書簡」（1914 年、1915 年）

6-8　原稿「芥川龍之介のおもい出」（1952 年 7 月 24 日）

6-9　『旧友芥川龍之介』朝日新聞社 1949 年 8 月

6-10「菊池寛と芥川龍之介　その思い出」（『読売新聞』1955 年 9 月 12 日）

〔7-5. 6. 7. 8〕

（Ⅱ）

7-1　貞子（恒藤恭の妹）宛　はがき（1912 年 11 月 1 日）「横浜のゲーティ座でやったサロメといふ英国の劇をみにいった」「芥川君、石田君も一緒」だったと記している。

7-2　「サロメ」（複写）（『松陽新報』1912 年 11 月）

7-3　作文「絵画論」（冒頭部分）（1913 年春頃）後半部分には「描かれたる画は、抽き出されたる彼の精神生活の一部」とある。

7-4　「翡翠記」（『松陽新報』1915 年 8 月）夏休みに松江に帰省したとき、芥川を招き、家を借りてともに過ごした。その時の随筆。そのうち３編は、芥川の書いた「日記より」（のちに「松江印象記」として『芥川龍之介全集』1927 年に所収）が引用されている。

7-5　スケッチ「京のスケッチ」（1914 年）

7-6　スケッチ「東京のスケッチ」（1915 年）

7-7　スケッチ（1918 年）

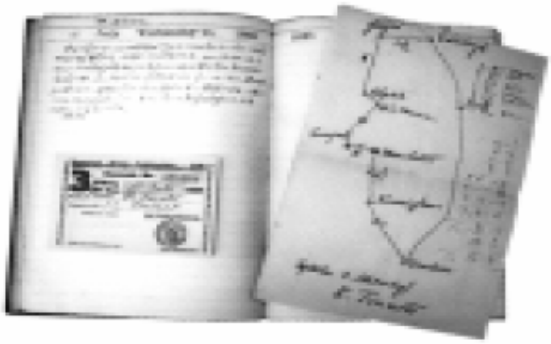
7-8　スケッチ（長男信一の誕生）（1918 年）

## ８　留学中のスケッチ、資料

京大助教授時代の 1924 年 3 月から 26 年 9 月まで、フランス、ドイツなどヨーロッパに留学した。留学中の日記や写真、手紙やはがき、新聞・雑誌などの資料が残されている。

留学中のスケッチも多数残されている。恒藤が描く人物は、街や公園でみかける普通の市民であり、その日常のさりげない表情や姿が暖かい目でとらえられている。ヨーロッパへ行く途中、停泊した港でボートをこぐ労働者を描いたスケッチも残されている。

〔8-2〕



〔8-9〕

8-1　留学時のスクラップ

8-2～6　留学時のスケッチ

8-7　電報　河上肇より（1924 年 3 月 9 日）

8-8　電報　小栗栖国道より（1924 年 4 月）

8-9　日記（1925 年）

8-10 留学時のアルバム

〔水彩画〕恒藤恭筆

○　今回の展示は学術情報総合センター恒藤記念室所蔵の資料を中心に企画しました。

○　展示資料の入れ替え、また資料保護のための、複写・写真などによる展示も行います。

恒藤家をはじめ、協力をいただきました多くの関係者、団体各位に、深く感謝いたします。

大阪市立大学　大学史資料室

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

TEL 06-6605-3371　FAX 06-6605-3372